

瀬底島のアニガー

松本 隆・上江洲 均
(沖縄県立博物館)

Notes on the Water Storage Structure, Called Anigah, in Sesoko Is.,
the Okinawa Islands

Takashi MATUMOTO and Hitoshi UEZU
(Okinawa Prefectural Museum)

はじめに

瀬底島は、本部半島の西岸0.6km沖合いに位置する周囲8kmの島である。島と半島を結ぶ瀬底大橋が昭和60年に開通し、沖縄本島と結ばれた島は、観光や夏場の海水浴客で賑わっている。長い間島の生活を支え、島の人々に親しまれてきた連絡船は姿を消し、訪れる人もなく閑散とした船着場が印象的であった。

島の集落は、ウチグスク山（瀬底貝塚）と呼ばれている丘陵地の麓から、なだらかな勾配を描いて北西の方に形成されている。現在では集落の境界はなく、行政上も一つの区として機能しているが、近年まではシーク（瀬底）とイッチャファ（石嘉波）の二つの部落からなり、行政、祭祀、行事等すべて別々に執行されていた。古老の話によると、ナナキネー（七軒）の祖先がウチグスクに住んでいたが、水の便が悪いため麓に移り来て、旧瀬底部落へと発展し

たとのことである。また、『球陽』（尚敬31～33年）1743～1745年によると、本部の石嘉波部落から瀬底島に移住したことが記されており、これが旧石嘉波部落と考えられる。

瀬底島は水に恵まれない島として知られ、島内には、多くのカー（井泉）の跡や溜池が残っている。又、住家はもちろん空き家や屋敷跡にもいろいろな種類の貯水具や貯水槽が見られる。今回は島に残るこれらの貯水具・貯水槽について調査し、瀬底島における水の問題と、その変遷について考えてみたい。特に、原初的な貯水槽とおもわれるアニガーについては可能な限り実測を行い、その戸籍作りを試みた。調査期間の都合により、集落全体を調査することはできず、旧瀬底部落と、旧石嘉波部落の一部地域について行った。不十分な調査ではあるが、以下その結果の概要について述べる。

I. 水の問題

集落東方の丘陵地は樹木が繁茂して島の貴重な水源地帯となっており、旧瀬底部落のケーガーと旧石嘉波部落のイッチャファのカーはいずれもその周辺に位置している。二つのカーはそれぞれの部落の最も重



写真1. イッチャファのカー

要なカーであるが、その造りを見ると、かつて飲料水に利用していたことが信じられない規模と形態である。自然の傾斜を利用してその前面部に穴を掘り込んだだけで、露天の溜池にしか見えない。これらのカーは、少しの干ばつにもすぐに枯渇した状態になるため、雨が降るとお互いに競争するように汲んで貯水し、その水さえ使い果たしてしまうと、船で対岸の浜崎まで渡って洗濯した後、飲料水を運んで来たとのことである。

井戸を掘る試みは幾度となく行われたようであるが、岩盤の多い隆起珊瑚礁の島という悪条件のほかに穿鑿技術の問題もあって水脈を探し当てるまでに至らず、現在でも井戸を見ることはできない。戦後間もなくボーリングを行い、地下水による簡易水

道が敷設されたが、塩分が多くて飲料水としてはあまり利用できなかったようである。島では、天水をいかに効率よく取水し貯水するかに苦心して来たのであり、いろいろな種類の貯水具・貯水槽はその結果である。現在は、海底送水によって本島から送られる水不足の不安は解消されたが、残存している貯水槽等を通して、水の確保に苦労してきた島の人々の生活をかい間見ることができる。

II. 貯水具・貯水槽の種類

瀬底島で確認できる貯水具・貯水槽は、甕類・アニガー・コンクリートタンク類・ドラムカン等である。その中で最も多く目につくのはコンクリートタンク類で、簡単に破壊したり撤去出来ないことから、いたるところに残されている。甕類は古くから最も多く利用されてきた貯水具であるが、その多くは破損してしまい、現存して確認できるのは少ない。またアニガーについては、その所在の確認と実測を行った。その結果は次項で述べるとして、以下それぞれの種類別に概要を述べながらその変遷について考えてみたい。

1) 甕類

甕は、立木を利用して貯水したり、カー（井泉）から運び込んで貯水するのに最も重宝な民具であった。クバの葉や藁を立木に縛りその先端を甕の口に導いて貯水する

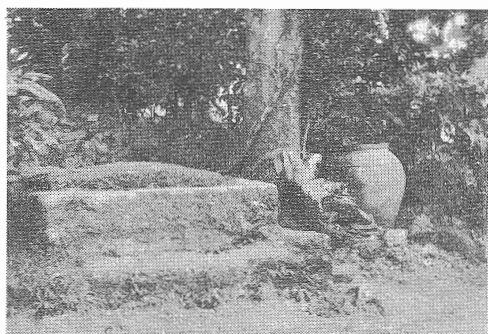


写真2. ユシ木の根元に設置された
甕とアニガー

方法は広く知られているが、瀬底島でも、瓦葺の家が普及する以前は各家庭における一般的な取水方法であった。取水にはユシ木が最も良く、福木から取水すると苦くてゴミがあり、飲料水には適しない。又、茅葺の屋根からの水は煤煙のため濁って飲料水にはもちろん雑用水としても利用できない。現在は立木からの取水方法を実見することはできないが、湧川家には数年前まで現存していたとのことである。ユシ木の根元に設置された甕が往時の姿そのままに残されていたり、木々の間に放置された甕によってその痕跡をうかがい知ることは出来る。貯水具として利用した甕類は広口のハンドー甕と水ガーミと呼ばれる細口の甕である。実測した水ガーミは、高さ98cm、胴径70cm（口径27cm）の大型であった。

2) コンクリートタンク

ア) 四角タンク

現存する貯水具類の中で最も容量がある。このタンクの設置により貯水量が大幅に増えて、水汲みの労力は軽減されたものと思われる。表面に建設年月日を刻字したもの

が多くみられ、最も古いものが昭和8年、新しいものは1963年の刻字が確認できた。1950年～60年代が多く、その頃盛んに設置されたことがわかる。地下を掘り込んで作ってあるため、外見上はそれほど感じないが、測定してみるとその大きさに驚く。測定した中で最大のものは仲田家の 322 cm × 239 cm、深さ 280 cm（地上高は57cm）であった。貯水部の大部分を地下に埋設してあるため蛇口が付いているのはきわめて少なく、多くは汲み上げ式である（調査した範囲では、後年に付けたと思われるポンプ式が二例見られた）。汲み上げ口と樋の引き込み口が天井部に作られているが、その作

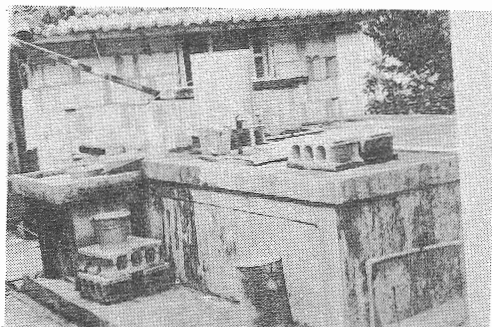


写真3. コンクリートタンク

り方にそれぞれ特徴があり、大工の個性がうかがえる。

四角タンクは母屋の西側に建設されている。多くのアニガーが屋敷の東方に設置されているのと好対象となっているが、地下を掘り込んだ形態はアニガーの造りを踏襲しているように思われる。

イ) 丸タンク

丸タンクは直径104cm（内径90cm）、高さ60cmの円筒を作り、それを二段、あるいは

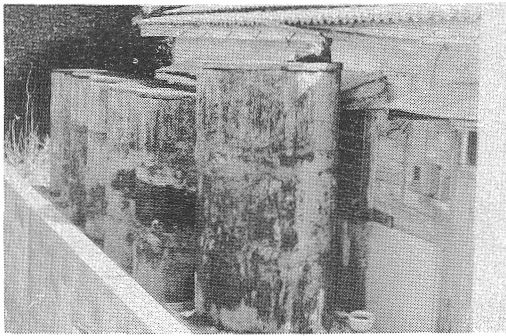


写真4. 丸タンク

三段に重ね利用している。戦後、各家庭で砂利を準備して合同で作ったとのことで、すべて同一規格である。アニガーや四角タンクが地下を掘り込んだ造りなのに対し、丸タンクは地上に設置されており、蛇口が付いている。又、各家の設置数には規則性はないが、最も多い利用例として、3段重ねを7基接続しているのが見られた。設置場所は四角タンクと同様、台所付近に設置されている。コンクリートタンク類は現在でも、雑用水はもちろんのこと、特に茶湯には水道水より天水の方が美味しく飲めるとの理由で利用している家が多いようである。

3) その他の貯水具

ドラムカンを利用して貯水したとの話も多く聞くことが出来る。簡単に持ち運びできるため、屋根からのこぼれ水を貯水したり、甕の代用として重宝された。甕の部分全部を切り抜いて貯水する方法と、寝かせた形で一部を四角に切り抜いて貯水する方法がある。立てたままの利用法は、高く汲み取りに不便であり、寝かせた利用法は

汲み取りには便利であるが安定性がよくない。どちらも一長一短である。現在は屋敷内で利用しているのは少ないが、畑で野菜等の散水に利用しているのがよく見られる。

その他、家々を巡って見ると樋から流れ落ちる水を、タライやプラスチックの容器に溜めてある。上水道が完備された今でも、水を溜めて使う長年の習慣がそうさせるのであろう。

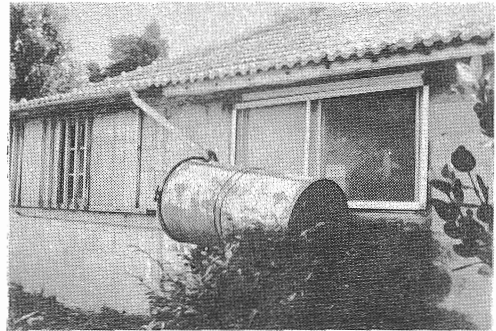


写真5. ドラムカンを利用した貯水

Ⅲ. アニガー

瀬底島で最も特徴的な貯水槽はアニガーである。アニガーは、穴ガー（穴井泉）の転化ではないかとおもわれるがはっきりしない。瀬底島において、調査したアニガーについてまとめたものが表1である。

屋敷内に穴を掘り、表面を漆喰で固めただけの掘り溜池である。また、穴を掘ってその四辺を切り石で積んだ箱型の貯水槽や、人工の集水場が付設された貯水槽も同じくアニガーと呼んでいる。ここでは便宜上、前者をアニガー、後者をアニガータンクと呼称して区別しておく。アニガータンクはアニガーからの発展と考えられ、多くの家

表 1. アニガー調査一覧表。表中の数値の単位はcm、() 内の
数値は貯水可能部分の内測値を示す。

番号	所有者名(屋号)	縦(内側)	横(内側)	深 さ
1	上 間 (コーサクヤー)	(190)	(120)	45
2	上 間 (ナンジャトウヤー)	(235)	(220)	120
3	不 明	(295)	(176)	105
4	玉 城 和 男	(193)	(170)	100
5	内 間 清 琳	測定不可能		
6	島 袋 (ソーギナヤー)	530 (150) (180)	215 (116) (182)	280 102
7	上 間 (クマバンヤー)	220	145	60
8	不 明 (ミャグローヤー)	250 (155)	214 (132)	117
9	仲 田	260 (145)	192 (124)	155
10	大 城 (マンナーヤー)	317 (258)	177 (117)	
11	〃 〃	234 (175)	155 (98)	
12	上 間 (コーサクヤー)	(220)	(172)	106
13	金 城	180	117	266
14	島 袋	150	150	
15	上 間 (ウィナハマヤー)	388 (302)	190 (114)	278
16	〃 〃	200 (156)	140 (88)	140
17	上 間 (カンキリヤー)	245 (160)	214 (125)	215
18	上 間 (イリンヤー)	235 (190)	222 (117)	174
19	宮 里 (ミンスブヤー)	425	270	
20	湧 川 (フチャンハタ)	123 (80)	97 (47)	280
21	嘉 数 (ハンキヤー)	156 (87)	145 (72)	195
22	知 念 (ブンチロヤー)	538 (167)	370 (95)	225
23	上 間	420 (150)	325 (95)	242
24	玉 城	405 (132)	266 (101)	232
25	奥 原	360 (153)	230 (114)	145
26	不 明	270 (150)	315 (92)	206
27	不 明	410 (140)	298 (70)	165

ではアニガ－の跡地を利用して設置したようである。設置場所における地理的条件に共通点が見られ、又、形態は違うにも関わらず全く同じ名前と呼ばれていること等から推測できる。

1) アニガ－

アニガ－は野菜やイモなどを洗う雑用水として使用するために各家に造られていたようであるが、今回の調査では5例しか確認することができなかった。(調査表番号1～5) その中で、番号1(上間家)は一度埋めてあったが、掘り返したとのことで規模も小さく形も変形している。番号5(内間家)は傾斜のある大きな岩肌が屋敷と接しており、岩を流れ落ちてくる水が溜るように工夫されて作られていた。しかし現在では観賞用の池に改造された庭園の一部になってしまい、アニガ－の形はすでに失われている。番号2(上間家)及び番号4(玉城家)は穴を掘込み表面を漆喰で仕上げただけの碗型をしており、最も原初的なアニガ－の特徴を示しているものと考えられる。番号3(屋敷跡)は、碗型の特徴

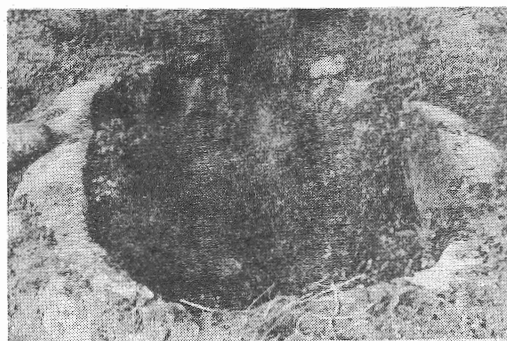


写真6. 調査表番号3のアニガ－

を残しながらも辺は切り石を使用しており、アニガ－とアニガ－タンクの発展段階を知ろうえで興味深い形態である。

前述したようにアニガ－はその跡地にアニガ－タンクを設置したり、コンクリートタンク等の出現により利用価値を失い埋められてしまった。残されている数少ないアニガ－は、島における水の習俗の変遷を知る上からも貴重な資料であり、長く保存してもらいたいものである。

2) アニガ－タンク

アニガ－タンクは、旧瀬底部落で16例、旧石嘉波部落で6例の計22例を確認することができた。形態の違いにより三つのタイプに分けることができる。理解しやすいように、埋設型・一部埋設型・集水場付設型に類別しておく。

(ア) 埋設型のアニガ－タンク

傾斜面を利用した造りで、貯水部のほとんどが地下に埋設されている。背面は地表と同じ高さしかなく、前面部の辺面もわずかしき地上に出ていない(図1参照)。天

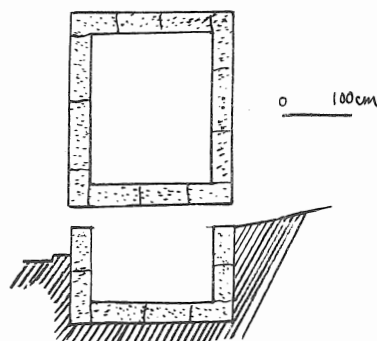


図1. 埋設型のアニガ－タンク
(調査表番号12)

水や、立木を利用して溜めるだけでなく、傾斜地を流れ落ちる冠水も溜められるような工夫とおもわれるが、そのことを確認することはできなかった。石と石のつなぎ目および内外面は一面に漆喰を塗ったようで、後年セメントによる補修のあとが見られる。測定の結果、内側（貯水可能範囲）の最大値は、220 cm × 172 cm・最深 266 cm、平均値は、190 cm × 128 cm・深さ 140 cmである。調査表番号 7～13 の 7 例がこのタイプで旧瀬底部落に散在している。

（イ）一部埋設型のアニガータンク

貯水部の大部分は同じく地下に造られているが、辺はすべて地上に顔を出している（図 2 参照）。地表面からの集水は出来な

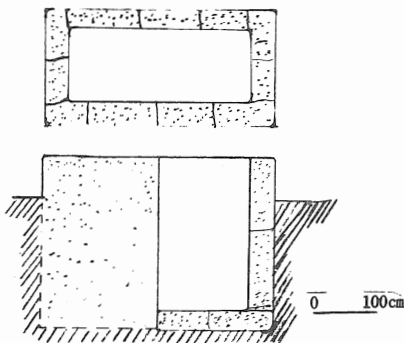


図 2. 一部埋設型のアニガータンク
（調査表番号 15）

い為、すべて人為的な貯水だけである。当初は、瓦葺の家が普及した後の貯水槽ではないかと思ったが、茅葺の家にも設置され、カーから運び込んで貯水していたとのことであった。茅葺から瓦葺へと移行していく中で樋を利用した貯水に変化して行ったのであろう。設置規模の相違が著しいのもこのタイプの特徴である。当時における貧富

の違いが設置規模に反映しているのか、あるいはまた、時間の経過による違いであるのかははっきりしない。内側の測定で、最も大きいものは上間家の 302 cm × 114 cm、深さ 278 cm で、最小は湧川家の 80 cm × 47 cm、深さ 280 cm である。平均値は 162 cm × 93 cm、深さ 213 cm となっている。調査表番号 14～21 までの 8 例がこのタイプで、すべて旧瀬底部落にある。

（ウ）集水場付設置型のアニガータンク

貯水部の背面部に、石を積み上げて人工の傾斜面を作り、その表面を漆喰やコンクリートで塗装して集水する工夫をしてある（図 3 参照）。集水場の面積を可能な限り

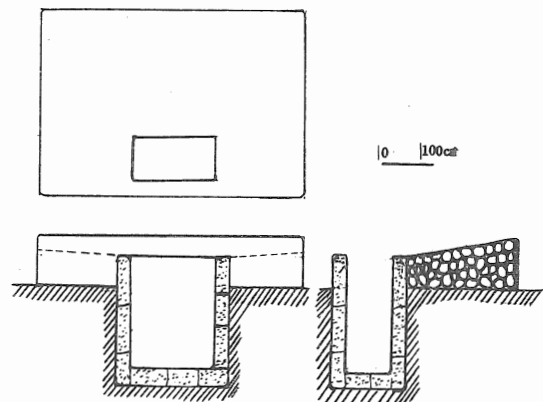


図 3. 集水場付設置型のアニガータンク
（調査表番号 22）

広く作って貯水量の確保に努めていることがわかる。機能的には自然の傾斜地を利用した埋設型に類似しているが、地上に積み上げて作った集水場の形態と規模は比較にならない。外側（貯水部も含む）を測定すると最大値が 538 cm × 370 cm、平均値が 400 cm × 300 cm にも達する大きさである。このタイプは旧瀬底部落には一例もなく、旧石嘉波部落に 6 例確認できる。調査表番号 22～27

がこのタイプである。

3) その他

島袋家のアニガー（調査表番号6）は上記三つのタイプに属しない特色ある形をしている。上間家には、アニガー（調査表番号1）とアニガータンク（調査表番号12）が隣接して設置されて残されているが、集水場を人工的に作った形跡は見あたらない。

島袋家のアニガーは、調査表の測定値を見てもわかるとおりかなり大きな集水場があり、しかも2つの貯水場が設置されており、一つは掘り溜池の特徴である碗型の痕跡を残し、いま一つは箱型で造られている。上間家のアニガーとアニガータンクは設置された当時の形で残されているが、島袋家では自然の傾斜面を利用して集水場を造り加えることによって良質で多量の集水ができるよう改良していったものと考えられる。両家のアニガーを比較することによって、時間の経過に伴う変革の様子をうかがい知ることが出来る。

さて、アニガーとアニガータンクについてその形態と貯水の方法からみてきたが、これを地域別にみてみよう。図4には、瀬底島の部落地域で確認したアニガーの所在地を示してある。図中の番号は、表1の調査表番号と共通である。

これからみると、旧瀬底部落と旧石嘉波部落ではかなりの違いがみられる。例えば、アニガータンクの三つのタイプのうち、埋設型と一部埋設型は旧瀬底部落にしか確認されない。逆に旧石嘉波部落には、集水場

付設型のタイプしか見ることが出来ない。丘陵地に形成されている旧瀬底の集落と、海岸線に近く比較的平坦な旧石嘉波の集落との地理的、自然的条件による違いであるのか。それとも、後年の移住による旧石嘉波は、それ以前からの住民であった旧瀬底に比べ、より一層水源に恵まれなかった歴史に起因しているのだろうか。いずれにせよ、二つの集落間における貯水槽の形態の違いは興味ある問題である。

おわりに

都市化の波はこの島にも急速に入り込み、生活習慣の変化は著しく、古い民俗はしだいに姿を消している。上水道の敷設によって水汲みに使用されていた多くの民具類も姿を消し、カー（井泉）もすでに遺跡と化してわずかにその痕跡を残すのみである。今回の調査でわずかに残されている貯水具や貯水槽を実見し、多くの体験談を聞くことができたのは幸いであった。

最後に、今回の調査に当たって協力していただいた島の皆さんに対し深く感謝の意を表する次第です。

参考文献

本部町史資料編Ⅰ，本部町役場，1979年，
沖縄大百科辞典，沖縄タイムス社，1983年，
郷土第16号，沖縄大学沖縄学生文化協会，
1978年。

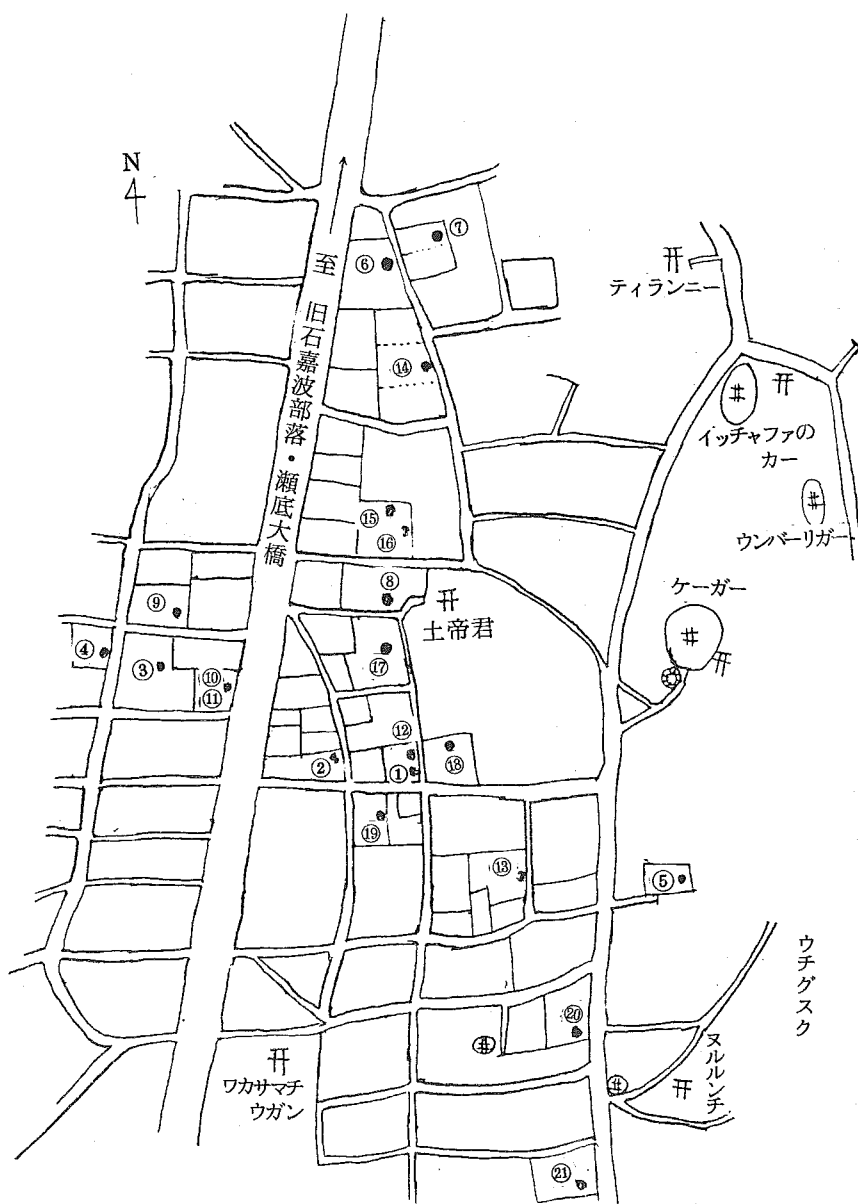
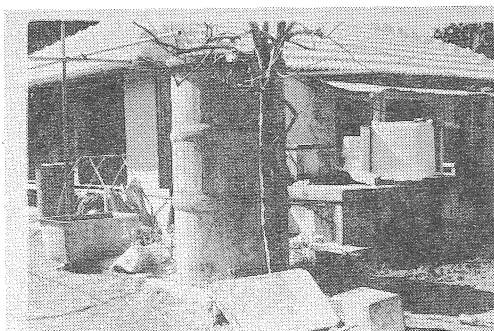


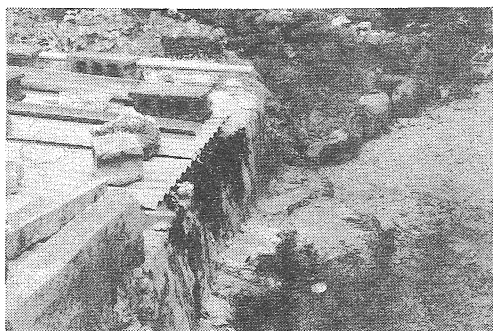
図 4. 旧瀬底部落におけるアニガー確認図
(数字は調査番号)



① 補助タンクを利用した貯水



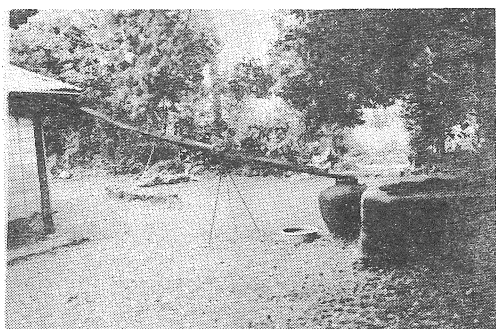
② いろいろな貯水具・貯水槽



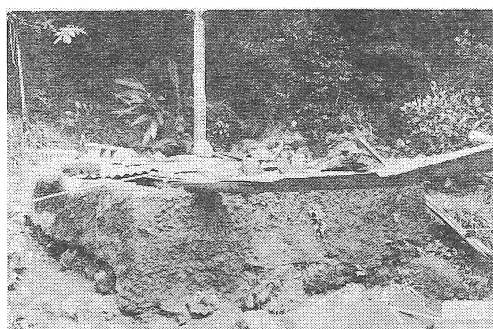
③ アニガータンクとアニガー



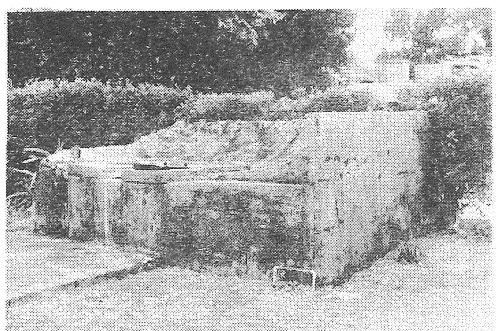
④ 屋敷跡に残されたアニガー



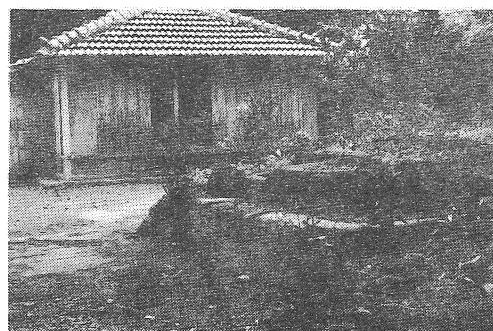
⑤ 一部埋没型のアニガータンク



⑥ 一部埋没型のアニガータンク



⑦ 集水場付設型のアニガータンク



⑧ 一部埋没型のアニガータンク